

一日千秋

福井県 仁愛女子高等学校 福岡知子

その日は、草木の露も落ちるほど秋風が吹いていた。

私の出場した競技かるた大会は終盤に差し掛かり、昇級を懸けた準々決勝が終わりを迎えようとしていた。私の陣の札は一枚、対して相手は二枚から一枚へ。このように互いに一枚になった勝負は「運命戦」と呼ばれ、相手陣の札は非常に取りにくいいため、選手は自陣の札が詠まれるよう祈るしかない。当然、ここまできて負けたくなかった。私は一つ息を吐き、手元の札を見つめる。「吹くからに」―「ふ」で取ることの出来る唯一の札。かるたをするほとんどの人が「福岡さんの札だね」と言ってくれる札。そして、私にとっての、「彼」の札。

小学三年生の秋、クラスで班に分かれて百人一首をした時に、私の目の前にあった「ふ」を勢いよく取った彼。自分の札だと思っていたその札を取られて、少し泣きそうな顔をしていた私を見た彼は「これはおれの札やから」と言い放ち、続けて「この札は二十二番だからおれの、おまえはこっちな、二十一番」と近くにあった「今来むと」を指した。歌番号を出席番号に置き換えたのだ、とその時気付いた。なんとこの屁理屈。しかしそれは彼なりの励みだったのかもしれない。その後、「今来むと」を取った時は、それまでが一番嬉しい気持ちになった。「いまこ」だしばったりじゃん」と悪戯っぽく笑う彼に、ありがたうの代わりに「わたしの名前は、いまこ」じゃないからね」と念を押した。私達はこの日から仲良くなったのだ。

中学生になった私達のクラスは別になり、やがて彼は学校に来なくなった。理由は分からなかった、だがそれを機に私達はどこか疎遠になってしまった。卒業式を最後に彼を見ていないし、高校も別になった。今、彼は何をしているのだろう。元気に過ごしているだろうか。目の前の試合に集中したいのに、ふとそんなことを考えてしまう。外では涼しい風が吹きつけているというのに、会場内は暑く、緊張感で張り詰められていた。自陣の札が出る確率は二分の一。こちらの札が出て、相手が攻めて取りに来るかもしれない。負けたら終わり、昇級は出来ない―そんな考えが頭を巡った。攻める勇氣も、守れる自信も私にはなくて、ただ不安と焦燥感に駆られるまま唇が乾いていく。心臓がばくばくと鳴って、頭の中ががんと鳴り響いていた。いろんな感情と胃の中の消化されたツナマヨおにぎりが、混ざって渦巻いている感覚がして思わずきつく目を瞑った。

下の句が詠み始められて、私は再び札と向き合う。余韻から次の句が詠まれるまでの一瞬間の「間」に全てを懸ける。そして読手から発せられようとする音を掴もうとした。

「いまこむと―」

びくりと体が反応した。空札だ。勝負はまだ決まらなかったが、今にも挫けそうだった心が、ほんの少し和らいだ。

出ないかもしれない、けれど、信じて待つしかなかった。

それに勝ちたかった。勝って新聞に載れば、彼が見てくれるかもしれないし、あの事を思い出してくれるかもしれないという、淡い期待があったからだ。

千年以上前に詠まれた「吹くからに」という歌が、たった十数年しか生きていない私達を繋いでいることが何だか不思議で、ふっと頬が緩んだ。ただ、さわやかな秋晴れや紅葉を揺らす風、そしてこんな風に思い悩む気持ちは昔も今も変わらないんだと、そう思った。

滲む視界を堪えようとして、大きく息を吸い込む。新しい空気とともに、欠けていた何か埋められていく気がした。私は一人ではなかった。観覧席からは同じかるた会に所属する先輩達が見てくれていて、違う級の友達も応援してくれていて、何より、一番近くに大好きな友達の話があった。大丈夫、そう自分に言い聞かせて全神経を耳に集中させた。もう怖くはなかった。掌の熱を握りしめて、私は再び構えをとる。そして僅かな静寂の後、かすかに音が聞こえた気がして、私はその札へ手を伸ばした。